

前回、この欄を書かれた元木さち子さんとは、別海町母子健康センターで共に働き、私の育児休職も含め、2年間のお付き合いでした。細い身体で丈夫ではないにもかかわらず、バイタリティあふれる仕事ぶりには、いつも感心させられ、また一人の母としても大変お世話になりました。今も、時々“里帰り”して、私たちを刺激して下さる大切な仲間です。

助産婦をやめられない理由

陣痛に耐え、元気な我が子の産声に、涙ぐむ産婦さん。安堵の笑みを浮かべやさしく見守る御主人。緊迫した雰囲気、一瞬で暖かさに包まれ、医師のいない責任の重さへのプレッシャーも、仕事のハードさも忘れ、助産婦の仕事をしていたよかった、と思う瞬間です。

当母子健康センターでは、最近、ほとんどの人が御主人立ち合いの中で出産するようになりました。母親学級で妊婦さんがラマーズ法の勉強をするだけで、はじめから「立ち合い」を希望する人たちは少ないのですが、母子健康センターが、家庭のように家族が気軽に出入りできるせいか、陣痛が開始した産婦さんの御主人の多くが、陣痛室で見守っています。手を握ってあげたり、腰をマッサージしたり、呼吸法と一緒にこなったりするうちに、自然の流れの中で分娩室へ――。

時には、生まれてくる子の幼い兄や姉が立ち合うこともあります。「おかあさん(痛くて)かわいそう」と涙ぐみ、「頑張ってる」と励まし、目をまるくして生まれる瞬間を見詰め、心から「赤ちゃん、かわいいネ」と言葉にします。幼いながらもいのちの誕生を受けとめるけなげな姿に、感動させられます。家族の絆を強く感じさせられるこのひとときを、助産婦として共有できる幸せ。だから助産婦をやめられずにいるのです。

りれ一随筆⁷¹

別海町母子健康センター(北海道)

上杉恵利子

オッパイ大好き

毎日が乳房マッサージの予約者で一杯のカレンダー。たった一人の日勤者にとり、もしこのうえ分娩が入ったら大変な仕事量になります。車社会の現在、出産する施設は、多少遠くても選べるけれど、乳房を見てくれる施設が近隣にはない、という実情に、どうしても超過勤務となってしまう。

乳房マッサージを受けるかたわら、誰にもいえないぐちやなげきを吐き出し、育児の不安やストレスを解消するために通ってくる人たちが、子供の成長とともに母親として成長していく姿を、ここではしっかりみつめることができます。そして、第2の臍帯切断とも思える断乳の日まで、育児をめぐるたくさんのドラマに、私たちもちょっぴり参加させてもらいながら、マッサージを続ける毎日です。

力不足を感じつつ

センターでの分娩を希望しても、異常になって出産できない人たち。月に1週間、隣接の病院に産婦人科が出張診療するだけでは、そうした人たちに対応するのに限界があります。転医の時期はよかったのか、転医先の選択はよかったのかといつも反省させられ、どうか良い出産

地域のなかで

地域の中で、妊産婦さんや子供たちとかかわり、泣き笑いを共にしながら、多くのことを学ばせてもらい、私自身育てられました。2～3年の予定が、思いもかけず結婚・出産・育児を経て、あっという間に13年余が過ぎてしまいました。多い時には8名いた助産婦も現在は4名に減ってしまい、助産婦として働き続けたいと思いつつも、心身共に疲れ気味、息切れしはじめている現状です。

年賀状に「4人の助産婦で3交替。家庭に戻りたい気持ちで一杯です」と書いてきた他市で働く同期生。大変な勤務をしているのは自分だけではないと思いつつも、一緒にふとんに入るとはしゃいで寝つかない子供たちを見るにつけ、手抜きばかりの家事、母親業を反省させられます。親子4人が健康に恵まれたからこそ、仕事を続けてこられたのだと今更のように感じています。

助産婦の数が少ないいうえに、新卒の若い助産婦が地方で働きたがらない現実には、ここ北海道別海町で働く私たちにも重くのしかかってきます。一緒に働く仲間が一人でも多く来て欲しいと願う日々です。

* * *

今回は、北海道立衛生学院助産婦科で共に学んだ春日井六実さんに、バトンタッチしたいと思います。いつも若々しい彼女は、一昨年10月、かねてより希望していた助産院を開業しました。母乳外来のために開業する助産婦は増えてきていますが、病院分娩が当然のように思われている今日、分娩を扱う助産院の開業は、大変な勇気とエネルギーのいることです。「助産婦という仕事が、こんなにも楽しいと感じたことは今までなかった」とおっしゃられているくらい、充実した毎日を送られ、彼女の助産院で分娩を希望する産婦さんも多いようで、自分のことのようにうれしく感じています。

● ができますようにと願うばかりです。

「病院での検診は、異常のことばかりいわれ不安でした。早く帰って、母子センターへ通いたかった」といていたYさん。母子センターでの分娩は正常だったものの、口唇裂の女の子でした。「人の裏表も知り、まわりの奇異の目、中傷に傷つきながらも、家族が明るく仲良く過ごすことが大事だと思っています」と書かれたお便りに、家族が流されたであろう多くの涙、それを乗り越え一生懸命頑張っている姿を感じます。障害を告げることをためらいつつも、「どうか前向きに、母として大きな愛で、この子を育てていって欲しい」と願いを込め、必死で言葉をかけた分娩台上での母児対面。ただ、見守ることしかできなかったのを覚えています。

家庭とのほざまで

新米助産婦として、最初に勤務した総合病院では、産婦・新生児・未熟児の看護について多くのことを学ばせていただきました。けれど、初対面での分娩介助、産褥1週間で切れてしまうかわり合いの中で、仕事への行き詰まりを感じ、2年2か月で退職。妊娠初期(妊娠届出)から産褥まで、地域の中で一貫した母子管理を実践していた別海町へ来ました。